

すべての子どもに機会を
すべての子どもに夢を

熊本地震被災地支援 中間報告書
2016.4-2016.11

全国の皆さまより多大なご支援をいただき
誠にありがとうございました。

熊本地震で被災した子どもたち130名に対して
塾や予備校などで利用できる学校外教育バウチャーを
提供することができました。

CFCは被災地の復興と日本の未来を担う子どもたちに
これからも寄り添っていきます。



前を向いて進む 子どもたち

Feature
Story

2016年4月14日以降、九州地方を相次いで襲った大規模な地震。震度7を観測した揺れは、熊本県や大分県に甚大な被害をもたらした。人々の命を絶ち、当たり前前に続いていた生活を奪い去った。

痛みを伴いながらも前向きに助け合う人々——
被害に見舞われた人たちに寄り添い、手を差し伸べたいと願う人々——

「両者をつなぐ架け橋のような存在でありたい」
そんな強い願いから、

CFCは被災した子どもたちの緊急支援に踏み切った。

全国からCFCに集まった寄付金は、誰に、どのような形で届けられたのか。一人の子どもの姿を紹介する。



写真撮影 久米凜太郎

熊本市内のアパートの一室。部屋の隅には、折り畳み式の小さなテーブルが置かれていた。中学3年生の中村優公子（なかむら ゆきこ）さん（15）が組み立てたものだ。

優公子さんは受験生。小さなテーブルで数学の問題を解いている。「こんな時間か」。使っていた部屋が洗濯物を乾かす場所になるため、テーブルごと居間に移る。今度は居間が、勉強部屋となり、再び優公子さんは問題を解き始める。勉強のためだけの部屋はない。「ここに引越して3ヶ月。もう、どこでも集中できるようになったんです」とにっこりと笑った。

二度の大地震、 車内での避難生活。

4月14日21時26分。突然起きた大きな揺れに、家で寝支度していた優公子さんはよろめき、思わず扉をつかんだ。「家の中にと閉じ込められるぞ」。両親と弟の4人で、慌てて車で近くの小学校に避難。校舎は避難者であふれ、優公子さんは校庭に止めた車内で寝た。翌日、家に戻ると、屋根瓦が落ち、壁には



ヒビが入っていた。家の中は物が散乱していたが、「修理すればいいし、片づければ」と自身に言い聞かせた。その日の夜、弟は気分が悪くなり、家で寝ることを頑なに拒み、車中泊することになった。

皆が寝静まった16日未明。「ズドーン！」と崖から突き落とされるような、14日夜の地震を凌ぐ強い衝撃に襲われた。「ガシャン、ガシャン」と近くの家の屋根瓦が落ち、電線が「パチパチ」と音を立ててちぎれるのが聞こえた。「今度こそ家がつぶれる」。真っ暗闇の中、近所の人たちが大勢慌てて家から飛び出す姿を前に、優公子さんの心臓は鳴り響き、頭が真っ白になった。「もし、家の中で寝ていたら……と、家族が犠牲にならなかつたことに胸を撫で下ろすと同時に、「これから、どうなるのかな」と今後の生活に不安を抱いた。

二度目の大地震で自宅は半壊し、住まなくなっていた。避難所は満員で、近所のスーパーの駐車場での中泊が約3週間続いた。車内で家族4人が体を折り曲げながら寝るのは辛かった。食事はカップ麺だけで、飲み物は配られた500mlの水を分け合った。いつでも避難できるように靴下は履いたままだった。優公子さんは頭痛や全身の痛み等、体の不調を訴えることもあった。

引越先には学習机がなく、 学年順位は落ちていた。

5月に学校が再開したが、2ヶ月間の授業の遅れを取り戻すために授業は

延長され、優公子さんが所属していた剣道部では、総体に向けたハードな練習が続いた。さらにアパートへの引越など、時間はあつという間に過ぎていった。引越先には、自分の部屋も学習机もなく、集中して勉強できなくなった。そんな中、返ってきた定期テストの成績表を開くと、学年順位は50番以上落ちていた。担任教諭から「このままじゃ希望の高校に行けない。大変なのはわかるが言い訳にはしていない」と告げられ、ショックを受けた。悔しさが込み上げてきた。

CFCクーポンの申し込みと、 新しい将来の夢。

ある日、学校で「もしかしら役立つかもしれない」と、一枚のチラシが配られた。「熊本地震で被災した子どもに、塾や予備校等で利用できる教育クーポンを提供します」との言葉に目が留まった。CFCのクーポン利用者募集のチラシだった。

帰宅し、「これ、今の私のためにあるようなものだよね！」と目を輝かせ、すぐさま母にチラシを手渡した。資料を取り寄せ、期待に胸を膨らませて申し込んだ。クーポン利用には定員があるため、不安になったが、利用決定の通知が届いた。引越先や自宅の修理、壊れた家財道具の買い替えなど、被災後にたくさんのお金が費やされていることに優公子さんは気づいていた。「これで、思い切り塾で受験勉強に打ち込める」。そう思うと被災後に沈んでいた気持ちが晴れやかになった。

夏休みに入り、自宅と塾での猛勉強が始まった。自宅では折り畳み式テーブルに向かい、苦手な数学の問題に粘り強く打ち込む。塾では授業後も、わからない問題を理解できるまで講師を質問攻めにしてきた。

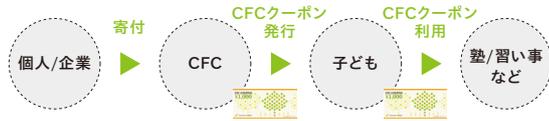
優公子さんには、「常に誰かが自分を応援してくれている」と感じるタイミングがある。塾の月謝袋にCFCクーポンを入れ、塾の講師に手渡す瞬間だ。「塾の費用を親が出してくれるのは当然だと思っていた。でも、それは決して当たり前じゃないんだってことに気付けたんです」。2学期に入ると、成績を取り戻すどころか、被災前よりも伸びていた。自分でも勉強の成果に手応えを感じている。

震災後、看護師という新たな夢ができた。そのために、小学生時代から続ける大好きな剣道と、勉強を両立できる公立高校への進学を目指している。看護師になりたいと思った理由の一つに、地震後に支えてくれた人たちとの出会いがある。被災して困っている人たちのために、地域の人たちが力を合わせて尽くしている姿、避難所で遠くの県から駆け付けてくれた方が、優しく声をかけながら水を手渡してくれた姿に胸が熱くなった。そして、CFCのクーポンに、遠くから励ましてくれる人の思いも実感している。

「いつか、自分も人を助けることができる大人になりたい。それが被災した自分を支えてくれた人への恩返しだと思ふ」。優公子さんは力強く前を見据え、そう語った。

CFCの熊本地震被災地支援活動

全国からいただいた寄付金を原資に、熊本地震で被災した130名の受験生(中学3年生、高校3年生)に、一人当たり10万円分の学校外教育バウチャー(CFCクーポン)を提供し、子どもたちが安心して学び続けることができるようサポートしました。



審査方法

- 書類審査** ▶ エントリーシート、
罹災証明書等の被災を証明する公の書類を提出
- 審査基準** ▶ 被災状況(住家被害、人的被害)

実施スケジュール

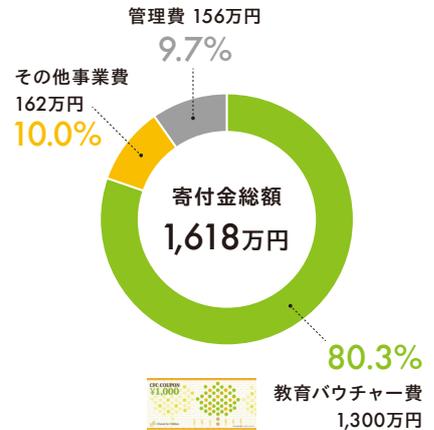
2016年5月25日	バウチャー利用者募集開始
2016年6月30日	一次申込締切
2016年7月29日	バウチャー一次提供/二次申込締切
2016年8月29日	バウチャー二次提供
2016年9月15日	バウチャー三次提供 (バウチャー申込者全員に提供完了)
2017年3月31日	バウチャー利用有効期限

CFC熊本2016実施概要

対象者	熊本地震で被災した中学3年生、高校3年生 ※住家全壊・半壊被害又は主たる生計維持者が死亡した世帯の子ども
バウチャー給付額	一人当たり10万円分(総額1,300万円分)
バウチャー利用期間	2016年8月1日～2017年3月31日
バウチャー利用者数	130名 ※バウチャー利用申込者数:130名 学年別: 中学3年生:90名、高校3年生:40名 地域別: 熊本市:66名、上益城郡:53名、阿蘇郡:5名、宇城市:4名、 (被災時) 宇土市:1名、合志市:1名 ※全て熊本県内 被災状況: 住家被害…全壊:47名、大規模半壊:27名、半壊:56名 人的被害…主たる生計維持者の死亡:2名
バウチャー取扱教室数	144教室(学習塾、予備校、通信教育、習い事等の学校外教育機関) ※2016年11月1日現在
支援者数(寄付・助成)	個人寄付者1,084名、協賛企業・団体23社、助成団体2団体
運営体制	実施主体: 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン 協力: 特定非営利活動法人ブレンヒューマニティー、 熊本県教育委員会、熊本市教育委員会

熊本地震被災地支援指定寄付金等の使途(計画)

熊本地震被災地支援のために、全国の個人・企業・団体の皆さまから総額16,182,693円のバウチャー指定寄付金(一部助成金を含む)をいただきました※。寄付金の80.3%に当たる13,000,000円を学校外教育バウチャー費用に充当しました。また、寄付金の10.0%にあたる1,618,269円を子どもの募集・審査等の事業費に、残り9.7%にあたる1,564,424円を寄付金の募集等の管理費として充当しました。
※事業運営のための資金に使途を限定してご支援いただいた助成金を除きます。



「大規模災害被災地バウチャー事業指定寄付金」の使途に関するお約束

- ①寄付金の90%以上を子どもへの直接的な支援費として使用します。
80%以上を教育バウチャー費、残り10%程度をその他事業費(子どもの募集審査費用等)に充当。
 - ②寄付金の10%未満を法人の管理費として使用します。
子どもたちを間接的に支えるための費用。寄付金募集のための広報費、管理を行う職員の人件費等。
- ※事業実施において資金余剰が発生した場合は、大規模災害被災地バウチャー資金として指定正味財産に繰り入れ、今後の災害に備えます。バウチャー利用期限時点の未使用バウチャーも、同様の取り扱いとします。

寄付者の声 ～ 総勢1,109の個人・企業・団体の皆さまより、温かいご支援をいただきました ～



中村 明日香さま (団体寄付者)
ロート製薬株式会社 かるがも委員

私たち「かるがも基金」はロート製薬で働く有志が加入し、月々の給与天引きから成り立っている基金です。熊本県で発生した地震がきっかけでCFCと出会い、お世話になりました。被災した子どもたちが被災前と同じように勉強できる機会を提供し、可能性を秘めているすべての子どもたちの夢をサポートしたい!という気持ちに賛同し、支援をさせていただきました。
たくさん子どもたちにその想いが少しでも届くよう願いを託し、これからも応援していきたいと思えます。



三井 悠さま (個人寄付者)
大学図書館員

熊本で地震が起こった時、遠くにいる自分に何が出来るのかと改めて考えました。東日本大震災のことを思い出し、そして現地で復興の様子をみてきた経験から、天災が起こった直後に経済的な困難で学ぶ機会が制限されることで、子どもの未来の可能性が閉ざされてしまわないようにすることが重要なことだと思い、教育機会の保障のため活動しているCFCに寄付を託そうと考えました。
少しでも多く子どもたちの支援に繋がるように、これからもCFCの活動を応援し続けます。